

# ビジョンストーリー 【スポーツ×ツアー編】

僕の名前はたける、小学6年生。パパとママとお姉ちゃんと4人でこの街に住んでいる。

誰にも言えないけど、実は僕には見るだけで辛くなるものがあるんだ。それは玄関にかけてあるサッカーボール。

僕はそのサッカーボールを見るだけで胸がキュッと苦しくなって、思い出しちゃう辛さを僕の心から消したいとすごくすごく思っちゃう。

でも、そんなことパパには絶対に言えない。本当は一番にパパにわかってほしいことだけど、僕はパパとの約束を破っちゃったし、理由を言ったらパパが悲しむから絶対に言えないんだ。

僕は2年生の時に僕が住むこの街のプロサッカーチームの試合を観に行って、そこで「僕はサッカー選手になる」って決めたんだ。だって、ボールをまるで自分の体みたいに自由に操って、敵の選手の間を風のように通り抜けて、ゴールを決める。そんな姿を見ちゃったら、誰だってサッカー選手になりたいって思うでしょ。

僕は帰り道、パパにどうしてもと言って、僕の小学校でいつも練習をしているサッカー少年団に入れてもらえるようお願いしたんだ。パパはその時言ったんだ。パパとの約束を守るなら入ってもいいよって。

「練習をがんばること。」「あきらめないこと。」その時の僕には、僕が見たサッカー選手が将来の僕に見えたから、練習なんてがんばれるさ、あきらめることなんてないさと思っていたんだ。

パパは僕のために練習のお迎えにいつも来てくれたし、練習試合の送り迎えも率先してくれて、サッカーのことを勉強して審判の資格も取ってくれたんだ。

でも僕は、僕の一番の応援者のパパとの約束を破っちゃったんだ。5年生の時に、僕はサッカー少年団を辞めた。そして、その時に僕は二度とサッカーボールにはさわらないって決めたんだ。



サッカーを続けられない僕をみんなはダメな奴って言った。

でも、そんなことを言うみんなにはわかりっこない。僕がサッカーをこれ以上嫌いになりたくないからやめたってこと。

サッカーが今でも大好きだし、みんなのように僕もサッカーがうまくできたら僕だって続けていたさ。でも、どうしてもボールがうまく蹴れないんだ。僕のところにパスがきても緊張しちゃってうまく蹴れない。そのせいで相手に点を入れられちゃったこともある。そんなへなちょこな僕だから、いつの日か僕のところにパスが来なくなったんだ。サッカーを始めた時、ボールを持っているだけですごくうれしかった僕の気持ちなんてどこかへ行っちゃった。だから僕は決めたんだ。サッカーボールには二度とさわらないって。

たけるの父慎司は、サッカーを辞めてしまったたけるにどう接していいか思い悩んでいた。

たけるには発達障害があり、その特徴からくる不器用さは理解していたが、それでもたけるが目をキラキラさせてサッカーをしたいと言ったあの試合の日のこと、サッカーボールをさわっているだけで嬉しそうにしていた姿を、父親として全力で大切にしたいとただ、自分にできることをやってきた。でもそれがたけるを追い詰めてしまったのではないか。



ある日、社内食堂でいつものメンバーとランチをしている時、ふと思い悩んでいることをこぼしてしまった。

するとメンバーの一人俊輔があるツアーの話を知ってくれた。

慎司の住む街と地方の街、サッカーチームのスポンサー企業、そして旅行会社と航空会社が連携して企画された「サッカー選手と行く、サッカー大好きな気持ちを大切にできるツアー」が今、参加者を募集しているとのことだ。

俊輔の話によると、このツアーはオリパラに向けて国が進めている「心のバリアフリー」を官民一体となって推し進めるため、複数の行政と企業が連携して企画されたそうだ。慎司はこれしかないと思った。サッカーが上手にできなくなっただけでいい、サッカーが大好きな気持ちをたけるがこれからも大切にできるのなら、このツアーにかけてみよう。

たけるは初めての旅行で緊張していた。

初めてのことが苦手で、緊張と不安からパパやママ、お姉ちゃんにも迷惑をかけてしまうことがたくさんあったからだ。でも今日はがんばろうと決めていた。だって、たけるが2年生の時に見た試合に出ていた選手がすぐそこに居るんだから。そして何よりも、たけるの住む街の人、サッカーチームのスポンサー企業の人、旅行会社と航空会社の人達が、そんなたけるの困りごとを理解してくれているんなことを準備してくれたんだから。みんなが準備してくれたツアーのことがわかるしおりとグッズを握りしめながら、たけるは憧れの選手をずっと見ていた。

僕が飛行機に乗ってある街のサッカー練習場に着くと、その街のサッカー選手たちが待っていて、僕の憧れのサッカー選手達と一緒に、リフティングやドリブルを早速見せてくれたんだ。

その瞬間、僕がサッカー選手になると決めたあの試合の日と同じドキドキを感じたんだ。

でもそれと同時に、サッカーボールを見るだけで辛くなってしまいうキュっも感じてしまって、僕はどうしていいかわからなくなった。泣いちゃいそうになって、でも誰にも見られたくないから我慢していたら、パパが手を握ってくれたんだ。

その時思ったんだ、もしかしたらパパは僕の気持ちわかっていてくれたのかなって。

僕は他のみんなのように積極的にはなれなかったけど、憧れの選手がいたから僕はがんばってプログラムに参加したんだ。

その夜、サッカー選手の人達と夜景を見に行ったんだ。

そこはすごくきれいな公園で、こんな世界があったらいいなということ、プロジェクションマッピングっていう光と映像で見せてくれたんだ。

僕はその光の世界にとっても安心して、なんだか昼間の辛い気持ちがなくなっちゃうような気がした。そしたら、僕の憧れのあの選手が僕に声をかけてくれたんだ。

「たけるくん、サッカー好き？」



僕はなんて答えていいかわからなくて困っていると、やさしく話してくれたんだ。

「たけるくん、サッカーに一番大切なことはサッカーを好きだって気持ちなんだよ。

僕たちはプロだから、どうしても勝ち負けやうまい下手で成績表のように評価されちゃう。

下手だなんて言われた時は、プロの僕でも落ち込んじゃう。

でもね、その時にいつも思い出すんだ。初めてサッカーボールを買ってもらった時のうれしい気持ちを。

僕はたけるくんにはサッカーを大好きだって気持ちを大切にしてほしい。

サッカーがただただ大好き。そこに勝ち負けなんて関係ない、うまい下手なんて関係ないんだ。

プロの僕はそれをたけるくんに伝えるために、今日ここにきたんだ。」

僕は涙が止まらなくなっちゃって、鼻水もたれちゃってかっこ悪かったけど、今までパパにも言えなかったことを全部話したんだ。そして本当はサッカーが大好きだってことも。

後から聞いた話だけど、僕と選手のやり取りをパパはずっと陰から見ていて、パパも泣いてたんだって。

パパに悪いことしたと思ってたけど、パパは僕のことを心配してくれてたんだね。

さすがパパ、今でも僕の一番の応援者だったんだ。

僕は今、学校から帰って玄関を開ける度に見るものがあるんだ。

それは、玄関にかけてあるサイン入りのサッカーボール。

僕はそのサッカーボールを見るだけで胸がとても温かくなって、

あのツアーの日のことを思い出すんだ。

「サッカーを大好き！」今の僕はこの気持ちさえあれば、

どんなことだって乗り越えられるって思ってるよ。

